

文学研究科 文化財学専攻博士後期課程

氏名	室瀬 祐
学位の種類	博士(文化財学)
学位記番号	甲第4号
学位の日付	平成26年3月14日
学位授与の要件	学位規則 第4条 第1項該当(課程博士)
学位論文題目	国宝・八橋蒔絵螺鈿硯箱の復元研究 ～鉛装飾技法を中心に～
論文審査委員	主査 教授 小池 富雄 副査 教授 河野 眞知郎 副査 MOA美術館館長 内田 篤呉

内容の要旨及び審査結果の要旨

室瀬祐の論文は17～18世紀、尾形光琳が制作に関与したと考えられる八橋蒔絵螺鈿硯箱（国宝・東京国立博物館）を対象とした技法・材料の復元研究である。八橋蒔絵螺鈿硯箱は漆工史上特異な作品群のひとつである琳派作品の代表作であり、伊勢物語「八橋」の段を主題に燕子花を大胆に表した意匠構成の他、塗り立ての塗膜面に平蒔絵や鮑の厚貝を配した技法・材料の面からも極めて重要な作品である。特に琳派作品の特徴のひとつである鉛の使用は視覚的にも見る者に鮮烈な印象を与える。本作品については過去にも様々な研究がなされて来ているが、他の作品とは特徴を異にする蒔絵や螺鈿、鉛などの装飾技法について詳細な検証はされてこなかった。特に鉛装飾については不明な点が多く、現在鉛の腐食が文化財保存の点から急務の研究課題とされている。本論文は琳派作品における鉛を用いた作品に主眼を置きその製作技法について述べ、さらに髹漆、蒔絵、螺鈿などの技法についても技法復元を行い、実際に復元制作を行うことで「八橋」に施された技法・材料の解明を行っている。

本論の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 漆工技法の研究-漆工技法史-

第2章 鉛板を用いた漆工品の研究

2-1 樵夫蒔絵硯箱

2-2 住之江蒔絵硯箱

2-3 舟橋蒔絵硯箱

2-4 八橋蒔絵螺鈿硯箱

第3章 鍍付液の研究

3-1 鉛について

3-2 鉛の保護皮膜について

3-3 鍍付液

3-3-1 実験の条件

3-3-2 各薬品の効果

3-3-3 試薬の濃度

3-3-4 試薬の液温

3-3-5 重ね塗り

3-3-6 漆の影響

3-3-7 銀に対する色づけ効果

第4章 国宝・八橋蒔絵螺鈿硯箱の技法復元

4-1 蒔絵

4-2 螺鈿

4-3 髹漆

4-4 鉛板

第5章 国宝・八橋蒔絵螺鈿硯箱の復元制作

5-1 木地制作

5-2 髹漆

5-3 加飾(螺鈿、鉛板、蒔絵)

図版

参考文献

研究目的

漆工芸は、天然素材である漆を塗料、接着剤、絵の具など様々な用途で駆使し、美しい芸術品とするものである。蒔絵や螺鈿といった煌びやかな素材に漆の艶やかで潤いのある質感が程よく呼応し、他には表現することのできない魅力を表す。漆が世界中で東アジア一帯でのみ採取されることも手伝って世界的に類例を見ない漆工芸は、我々の誇るべき文化であると言える。漆自体の歴史を掘り起こせばそれは9000年前にも遡り、未だ文明とはほど遠かった日本の中でも、人は漆の持つ力に気づき、それを活用していた。芸術的な表現が姿を現すのは大陸から技術が伝わってきた7世紀ごろと思われ、以降1300年以上に渡って脈々と進化を遂げてきている。

このように長い歴史をもつ漆工芸は、漆という素材の力とそれを使いこなす技術によって廃れることなく現在まで伝えられてきた。しかし近年、漆工芸に対する認識は薄れ、技術や知識の風化、後継

者不足が問題視されている。漆工芸の技術や材料について知識を深めその魅力を伝えていくことは、日本の誇る漆芸文化の継承に繋がる重要な研究であり、本研究はその一端を担うものである。

本研究の主題は、漆工品における鉛装飾についてである。鉛装飾は琳派作品を中心とした漆工品に数多く見られるが、現在その多くには白い腐食生成物、いわゆる白錆が生じている。しかしこれまでに鉛装飾の研究は行われてきておらず、白錆が生じる原因や改善策は論じられてこなかった。筆者はこの状況を憂慮し鉛装飾について研究を重ね、琳派作品の代表格とされる八橋蒔絵螺鈿硯箱(国宝・東京国立博物館)の蓋表に貼られた鉛板に白錆が生じていないことに注目した。八橋蒔絵螺鈿硯箱(以下「八橋」とする)は鉛装飾以外にも技法・材料上不明な点の多い作品であり、本研究ではこの硯箱の復元制作を通し、これまで未解明であった「八橋」に施された漆芸技法・材料の実態を明らかにするものである。

第1章 漆工技法の研究-漆工技法史-

漆工芸における技法・材料は、数ある工芸の中でも極めて複雑であり、琳派作品の鉛装飾はその多様な変遷の中でもとりわけ異彩を放っている。漆工史研究はこの複雑な文化を理解する上で大変重要であり、これまでも多くの研究者によってその実態が明らかにされてきた。第1章では過去に積重ねられてきた漆工史研究のうち、技法・材料に重要と思われる内容に焦点を当て、さらに近年の研究を交えて漆工技術史を概観している。漆工史研究は主に文献から得られる情報と、作品から得られる情報が研究の基盤となる。前者は過去にも盛んに行われてきた研究手法であり漆工史研究の主軸と言える。一方で技術方面から漆工史を整理した例はこれまでになく、本章は今後の漆工芸における技法・材料研究の手がかりとして活用が期待される。また、筆者本人が調査研究を行う中で発見された未発表の琳派作品が紹介されている点も興味深い。

第2章 鉛板を用いた漆工品の研究

第2章では、数ある琳派作品の中から「八橋」および「八橋」の研究を進める上で関係が深いと思われる、樵夫蒔絵硯箱(重文・MOA 美術館、以下「樵夫」)、住之江蒔絵硯箱(重文・静嘉堂文庫美術館、以下「住之江」)、舟橋蒔絵硯箱(国宝・東京国立博物館、以下「舟橋」)を対象に調査研究を行い、4作品に施された技法について解説し、各技法の比較検討を行っている。

蒔絵の比較は、4作品全てにおいて行っており、「八橋」「住之江」「舟橋」は金蒔絵が画面の大半を占めているのに対し「樵夫」では付加的な表現として使われている点や、「八橋」「住之江」は同一平面上に同様の技法で全ての蒔絵を施しているのに対し、舟橋」は技法が複雑に混在しており、より緻密で計画的な蒔絵表現と言える点など、内容は筆者ならではの視点を活かした詳細な情報に至っている。また「八橋」「住之江」は金蒔絵が塗り面から鉛上へまたがって描かれているという共通点や、蒔絵に筆の跡が確認できるのは「八橋」のみであるといった指摘などは、今後の琳派蒔絵を研究していく上で重要な指標を与えるであろう。また金粉の粒子は「八橋」「住之江」「舟橋」は0,005mm～

0.015mmの粒子が混在し、比較的粒径と形状が整っており、一方で「樵夫」の金粉は0.1mm～0.4mmとばらつきが大きく形状も一定でないとしている。

螺鈿の比較は、螺鈿が用いられている「樵夫」「八橋」の2点であり、調査研究や手板実験の結果から使用している貝はどちらも鮑貝で、「樵夫」の螺鈿は厚さ0.2～0.4mm、「八橋」は0.5～0.6mm程度であると推察している。また「樵夫」「八橋」それぞれの螺鈿において輪郭線に焦点を当てた考察をしており、鑪の使用の有無や、糸鋸で刻みを入れて凹凸を付けている箇所などを指摘している。

銀の比較は、銀が用いられている「住之江」「舟橋」「八橋」の3点で行っている。銀の錆色、厚みなどを詳細に調査し、鉛に象嵌されている部分は、「舟橋」では銀の文字が鉛面よりもさらに1mm程度高くなっており、「住之江」では銀と鉛の段差が最大でも0.2mm程度としている。なかでも「八橋」の銀板は特徴が大きく異なるとし、表面状態や色、輪郭の表現を詳細に研究しその技法の特異性を述べている。

鉛の比較は4点全てで行っており、「舟橋」と「八橋」は比較的近似する特徴をもつとしている。一見色の濃いように見える「舟橋」については、丸みの強い器形による光りの反射の影響を指摘しており、これまでの調査研究で述べられてこなかった鉛の特徴がよく示されている。一方で「樵夫」「住之江」については少し系統が異なるが、色だけに注目すれば「住之江」の外面に貼られた鉛は「八橋」「舟橋」に近いとしている。

これらの各技法について述べられた研究は過去に類を見ず、第2章は制作経験のある筆者ならではの視点が発揮された調査研究といえる。こういった詳細な調査研究からは、新たな作品の魅力や歴史を発見する可能性もあり、今後の調査研究の発展に貢献する内容と考えられる。

第3章 鍍付液の研究

第3章では本研究の主題である鉛装飾技法について述べている。筆者は光琳研究において重要な一次資料である『小西家旧蔵・尾形光琳関係文書』中の、光琳自筆の覚書帖にある「ナマリ銀ノサヒ」の項に記された「エンシャウ（煙硝）三分 イワウ（硫黄）三分 タンハン（胆礬）二分 シホ（塩）少す（酢）ニテ」の記述から「八橋」になんらかの薬液が塗布されていた可能性を指摘し、その復元を試みている。薬液の復元に際して、条件設定に至るまでの予備実験を含め数多くの実験を積重ねており、手がかりの少ない鉛の性質の解明を行っている。本論では実験の結果から「ナマリ銀ノサヒ」の項に記載された薬品を基に復元した鍍付液が鉛の色づけに有効であること、また鍍付液を塗布した後、さらに漆を摺り込むことで「八橋」や「舟橋」の鉛板に近似する色づけが可能となることを明らかにしている。この研究は今後の鉛板装飾に関する研究の基盤となる貴重なデータであるといえる。さらに本論の中では、各薬品の特性にも注目しており、小西家文書に記された硫黄や塩、酢などそれぞれの薬品にどのような効果があるか詳細に研究している他、薬液は銀の色づけについても効果が認められた点など、内容は多岐にわたっている。本論は鉛に施された処理にとどまらず金属の特性や、それを有効活用した先人の知識を考える上でも極めて重要な視点を提供するものであり、漆芸だけでなく工芸全体の技法研究の発展を促す成果であると言える。

第4章 国宝・八橋蒔絵螺鈿硯箱の技法復元

「八橋」には鉛装飾以外にも未解明の技術が数多く存在する。第4章では各種の実験を通してこれらの技法について各種の実験・調査を行い、技法復元を行っている。蒔絵については金粉の号数、仕上げの技法、筆、葉の重ね方について実験を行い、金粉は3号前後で仕上げは平蒔絵であること、筆は黄軸の鶴書や面相筆を使用した可能性があること、葉の重ね方は先の蒔絵を粉固め、もしくは磨きまで終えた後に蒔絵を重ねた表現であると指摘している。

螺鈿は切削方法と輪郭線の加工方法について実験、考察を行っている。「八橋」の螺鈿は輪郭線に様々な凹凸があり、かつて鑿で打ち抜いて整形するという説もあったが、本実験では鑿の使用は可能性が低いとしている。さらに、糸鋸の刃による違いや、輪郭線の加工について検討を行い、糸鋸によって切り抜いた後、さらに同じ糸鋸を擦り付けるようにして整形するという切削方法が最も本歌に近似した輪郭線を再現できるという結論に至っている。

髹漆については、先行研究で黒色漆を塗った後に素ぐろめ漆で上塗りを施すとされてきており、本研究では実験手板と比較を行うことでこの説を裏付けている。また下地については調査研究の結果から山科地の粉を使用した蒔地である可能性が高いことを述べている。また鉛板については、表面の凹凸と色の再現を行っている。凹凸は金槌で鍛造した鉛板を表面の平滑な凝灰岩に押し付け質感を転写することで再現し、色は3章で復元した鍍付液を2~3回塗布した後、摺漆を1~2回塗布することによって本歌と近似する鉛表現となるとしている。

本論は、技法復元の核となる実験結果をまとめたものであり、筆者は実際に手板の制作や螺鈿の加工を行うことで本歌に極めて近い復元を実現している。技法復元は一朝一夕に結論が出せるものではなく、数多くの失敗を経て結論を導き出さなければならず、その功績は評価に値する。

第5章

第5章では技法・材料の復元研究の結果を元に行った、「八橋」の復元模造制作工程を記述している。復元は木地制作から装飾までの全工程を、蓋表を用いて行っている。復元の結果からは、手板実験や調査研究だけでは判断のできない詳細な技法が明らかになるため、技法復元にとどまらず復元模造を行った点は意義深い。蒔絵については、極近接した描割と蒔絵が重なり合っている部分とが混在しており、重ね部分を除外して考えると、その他は全て描割、もしくは輪郭が分かれていない葉文様の集合に分類されるとし、その結果から蒔絵の手順は同時にすべてを地塗りして粉蒔きを施すのではなく、一部ずつ地塗り、粉蒔きの工程を繰り返し、これらを一度粉固めしてから、最後に数枚の葉を描き足すという手順であると結論づけている。また金粉は手板実験から3号前後と判断したが実際には1号や2号程度の大きさの金粉が多く含まれている可能性があるとし、鉛や銀の鍍付けは上塗りを施した後に行う必要があることを指摘している。

以上、本研究では、これまでその殆どが未解明であった「八橋」の制作工程が明らかにされており、特に主題である鉛装飾については、着色の技法材料が詳細に記述されている。鍍付液の存在が明らか

になったことは鉛が用いられた漆工品の修復や、保存、展示において画期的なことであり、今後の文化財の活用と保存において本研究の貢献が期待される。

鉛の錆付けや摺漆がいつどのようにして行われたかや、金粉の正確な混合比、料紙箱の内部や底裏に描かれた光琳波の復元など、本硯箱を正確に理解する為の課題はいくつか挙げられるが、本論文が琳派作品の研究を進める上で重要な出がかりとなることは間違いないであろう。また、本論文には180を越える図版が添えられ、そのひとつ一つに解説がつけられていることは意義深く、特に復元の全工程の記録は重要な資料であるといえる。本研究は制作技術を持った筆者だからこそ可能となった、技法・材料の復元研究であり、今後もさらなる研究の成果と漆芸における技法・材料研究の発展を期待するところである。

審査結果

当該論文は、博士（文化財学）の学位を授与するのに相当と認められる。